

4) ともすれば、佇立する思想家、という傾向が目立った南方に対し、筆者自身の発想を自在に駆使することで、ポランニー、ユングなどの言説と巧みに連ね合わせることで、その思想像を見晴らしの良いものとしていること。

5) 筆者によって導き出された「創造力」の発揮される構造が、すぐれて汎用性に満ちており、単に学術の世界のみならず、芸術や日常的な思考の場においても十分援用可能なものであること。

このうち、とりわけ5)については、南方熊楠自身が明治末年に神社合祀反対運動に取り組むことで、自身の思想を実践化させようと努力した点を想起すれば、「象牙の塔」に籠りがちな研究から離れ、主体となる人物の「創造力」を実践的な場へと誘う可能性を秘めたものであるといえる。

その一方で、本論文において十分果たされなかった点もある。例えば、その論理展開の明快さを全面に押し出すことに重点を置いたことによって、南方その人の思想を扱った先行研究について、やや手薄な観がある（例えば松居竜五『南方熊楠 一切智の夢』〔1992年 朝日選書〕における「因果」の道筋への言及など）。また、強調する語句を反復して複数の章に使うことが、却って各章が個々に独立して持つ特色を薄めて、全体の叙述の起伏を減じさせてしまったのではないかと読み取れる部分が散見される。研究史上、自分の南方論がどこに位置づけられるのを見極めることによって、筆者自身による発想、あるいは叙述の形式もより洗練されたものとなり得る。しかしながら、これらの事項は決して本論文の成果を損なうものではない。

以上の諸点を検討した結果、本論文は小野梓記念「学術賞」に値するものとして認定する。

末尾となるが、本論文はその明晰な論理と抽出された思想的枠組みの堅固な点を審査委員から高く評価され、中外日報社が主催する「涙骨賞」（第五回）最優秀賞を受賞していることを申し添える。

以 上

2009年 02月 26日

小野梓記念「学術賞」選考委員会

委員長 渡 辺 裕 殿

小野梓記念学術賞審査報告書

主査委員 赤坂 喜顕 印

小島 隆矢 印

中谷 礼仁 印

候補者名：真鍋 怜子

研究科・学部等：早稲田大学大学院 創造理工学研究科建築学専攻

研究題目・業績等：2009年度修士論文『心象と表現―述壊する「家」をめざして―』
2007年度卒業論文『述壊される「家」についての研究』

1. 審査結果

受賞に値すると認める。

2. 論文審査概要

本論文は、家という人間にとって根源的な存在物に対しての粘り強い3年間にわたる思考の集積である。

一般に、学術論文が高度化することによって専門性は増すが、往々にしてそれは日常との乖離を生み出す。しかしながら家とはまずは日常であり、さらに根源的な存在である。それゆえ候補者の基本的なテーゼは、家として受容される観念に存在する根源的共通性を、厳密かつ一歩も日常からはなれることなく記述するという難問であった。（それを本論文では「大衆性」と称している）

以上のような問題意識は、昨今においてきわめて珍しい強靱な探求精神である。また同様のテーマを3年間にわたって継続してきたことは学的生活の模範として賞し、広く社会に知らしめるべきであろう。

以下は、その集大成でもある2009年度修士論文『心象と表現―述壊する「家」をめざして―』についてその概要を示す。

本論は大きく3部によって構成される。

序論をへた第一部「共同体と大衆性」においては、ユングにおける元型構造からはじまり、中世の激動期を生きた親鸞における既存仏教批判と「大衆性」への接近の足跡の分析、近世初頭における数寄屋作品の作られ方の連鎖にみいだされる弁証法的な継承性を伴った方法論、さらに既往の建築生産史のプロセスを基本とした商品化住宅における単なる、経済的通俗性のみならず、かくありたいと願う共通の心象性を見いだしている。本論の基本的骨格である。

次の第二部「組織と大衆性」においては、中世において東大寺の再興に関与した重源における大仏様建築、さらに近世初頭に登場した固有名義デザイナーである小堀遠州の作業を検討し、特にその型の「大衆」への伝播のされかたについて詳細に検討した各論である。また第一部、第二部とも扱われる時代、対象は一間脈絡がないが、基本的には花田清輝による転形期の図式を当てはめて、各時代の象徴的イベントとしてそれらを扱っているため、構成的齟齬はない。

最終である第三部「述懐する「家」をめざして」においては、それら検討によって獲得された知見を超時代的に「家」あるいは、現在の建築家による住まいの設計のプロセスに敷衍している。いま述解されうる「家」の課題と可能性を問うている。

全般として、候補者の血肉化された粘り強い思考が結晶した論文であり、従来の論文の水準は越えているといわねばなるまい。

欠点として、あまりにも多くの事象を扱ったために、たとえばクリストファー・アレグザンダーによる、曖昧な自然言語を用いた家の作り方であるパタン・ランゲージ等の解釈において皮相な一般的見解を基本にして再批判を行なっていること、ユングの元型論を論点の基本に据えてしまったことなどは、現在の知的地平においてはやや偏りが認められる。しかしながら今後博士課程におけるさらなる鍛錬の過程でより普遍的な論理を構築してくれることを確信している。

以 上

2010年2月28日

小野梓記念「学術賞」選考委員会

委員長 渡 辺 裕 殿

小野梓記念学術賞審査報告書

主査委員 仲 内 英 三 印

西 原 博 史 印

川 岸 令 和 印

候 補 者 名 : 城野 一憲

研究科・学部等 : 大学院法学研究科

研究題目・業績等 : 「government speech 論」の諸相

3. 審査結果

提案された作品『「government speech 論」の様相』（以下、「本論文」という）は、情報流通との関わりにおいて政府が「表現者」として立ち現れる場面に着目し、その機能が憲法上正当化される条件をめぐる様々な理論的立場を検討しながら、国家と国民の関係に関わるアメリカの憲法理論と日本の憲法学との基本的スタンスの違いを浮き彫りにし、日本において憲法上の原則として運用するに足る精度をもった政府言論の許容条件法理を形成しようとする意欲的な作品であり、原資料にていねいに当たりながらアメリカにおける複雑な理論状況を丹念に整理する着実な業績であり、重要なテーマに野心的に切り込む姿勢に優れ、作品としては荒削りで未完成な側面も強いものではあるが、論題のスケールの大きさと候補者の将来性を評価して、小野梓記念学術賞を受けるに値するものである。

4. 論文審査概要

主査委員は各自において本論文を熟読後に2010年2月23日に判定のための第1回委員会を開き、本論文に関する共通理解を確認して評価を行った。

全主査委員において、本論文が丹念な文献処理を踏まえてオリジナルな着想に至る着実な学術業績である点については一致を見た。また、government speech 論の重要性、すなわち表現の自由という民主政の核となる人権原理をめぐる法理だけでなく、国家・国民関係の理解や民主政府の情報に関わる行為類型などとの関係においても極めて重要な憲法の基礎原理に関わる問題が扱われている点の認識においても主査委員は一致していた。

他方、本論文の理論的構成においては数々の欠落点も認められた。例えば本論文は、「知る権利」に言及するものの、多様な情報を国民が受領する可能性の確保方法をめぐるプレスの自由に関する理論・判例の研究を全面的に割愛し、政府の情報提供責任に関わる根本的な視座の一端を見失った。公教育の場面でも子どもという情報受領者の視点は消去される。これは政府の「表現者」機能の正当化条件をめぐる法理の形成において本質的な欠陥であり、アメリカ理論の整理における一定の歪みの原因となるものであった。

しかし、こうした欠陥を抱えた荒削りなものではあるが、それだけ複雑なテーマに野心的に切り込む意欲と将来性を高く評価し、主査委員は全員一致で上記「審査結果」のとおり、本論文が小野梓記念学術賞を受けるに値するものであるとの結論に到達した。

以 上

小野梓記念「学術賞」選考委員会

委員長 渡 辺 裕 殿

小野梓記念学術賞審査報告書

主査委員 佐藤 拓朗 印
西村 昭治 印
竹山 春子 印

候補者名：BEKKALI Abdelmoula (ベッカリ アブデルモウラ)

研究科・学部等：大学院国際情報通信研究科 国際情報通信学専攻 博士後期課程 3年

研究題目・業績等：RFID indoor Tracking System based on Inter-tagu Distance Measurement (タグ間の距離測定に基づくRFID屋内トラッキングシステム)

5. 審査結果

候補者（BEKKALI Abdelmoula 君）の研究業績は小野梓記念「学術賞」に相応しいものである。

6. 論文審査概要

(1) 有用性：GPSの発達により屋外での位置情報の取得は容易になったが、地下や屋内ではGPSの電波を捕捉することができず、GPSによる位置情報の取得は困難であった。BEKKALI Abdelmoula 君の研究はRFIDを用い屋内での位置情報取得を可能とするものであり、避難路の誘導等防災上の応用が可能な他、様々な分野での活用が期待できる。

(2) 新規性：従来の3個のRFIDリーダからの単純な応答から算出する方法に比して、BEKKALI Abdelmoula 君が提案した2個のRFIDリーダと複数の既知の基準点を提供するRFIDの組み合わせと、ベイジアン理論に基づく確率的アルゴリズムによる位置検出は非常に効率的かつ正確に位置情報を提供可能にしており、大変新規性が高い。

(3) 業績：IEICE、IEEEなどの国際会議においても採用されているばかりでなく、大川記念賞はITU-T Kaleidoscopeにも採録され、外部機関からも評価がなされている。また、引用文献においても多くの評価がなされている。

本研究は、今後さらに研究が進む領域であり、さらに多くの成果が期待されるものである。そして、上記(1)～(3)の理由により、本内容は、小野梓記念賞受賞候補として十分推薦できる領域に達していると判断する。

以 上